

◎ 訃報 太田敬子先生

本学会会長でありました太田敬子先生は、二〇一九年一月七日、ご逝去されました。

太田先生は、一九九六年に北海道大学文学部歴史文化論講座助教授として着任され、北大史学会の委員を何度も務められ、二〇一六年七月からは会長を務めておられました。

二〇一九年夏の規約改正により、委員長兼会長をお務めになりました。一〇月八日に行われた新委員の初会合では、太田先生が委員会を仕切っておられたことを今でも鮮明に記憶しております。

実は、すでにそのころ太田先生は闘病中であつたので、その後に病状が悪化し、急逝されました。まだまだお若かつた太田先生を失つたことは、大変に悲しく残念なことですし、ご病氣のことを一言も口になさらず、教育と研究に励んでいた太田先生の意志の強さにも改めて感動させられます。

太田先生が所属していた歴史文化論講座および二〇一九年度から所属された東洋史学研究室の教員のよびかけで「太田敬子先生 別れの会」が二〇二〇年二月一日に開催されました。学外の中東史の専門家や、元同僚、教え子も含め多数の方々が集まり、太田先生の中東史研究の軌跡も現地の写真も交えて紹介されました。太田

先生が、現地調査も熱心に行い、難解な言語の原史料と格闘しながら、堅実に研究を進めておられたことが、参加者に伝わりました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

北大史学会会長 白木沢旭児

彙報

◎ 二〇二〇年度総会にかわる北大史学会委員会
(二〇二〇年九月七日)

コロナウイルス感染防止のため、総会・大会は中止となった。総会にかわるオンライン上の北大史学会委員会で、北大史学会の委員・会計監査が以下の通り選出された。

〔委員〕 白木沢旭児・小倉真紀子・井上敬介・砂田徹・長谷川貴彦・梅村直樹・吉田拓矢・富士貴央・長瀬篤音
〔会計監査〕 松嶋明男

次に二〇一九年度の会計報告が行なわれ、以下の通り承認された。

I. 収 入

前年度繰越金

九六九、五九一円

二〇一九年度収入

三六五、八五二円

(内訳)

会費

三五三、〇〇〇円

広告代(北大出版会)

四、八四八円

抜刷代立替返却分

〇円

会誌販売代金 八、〇〇〇円
銀行口座利息 四円

合計 一、三三五、四四三元

II. 支出

二〇一九年度支出 三三三、一二六円

(内訳)

『北大史学』五九号・『史筵』一七号出版費用

(印刷代(含・抜刷代) および振込手数料) 二九八、四三〇円

郵送費

(『北大史学』発送、ゲラ発送、抜刷発送) 二一、九五四円

事務費用(ラベルシール、ノート、のり) 五、二七四円

交通費(『北大史学』発送・中央局へのタクシー代) 〇円

振替用紙印字サービス代 七〇三元

ホームページ・ネットレンタルサーバ代金 六、七六五円

次年度繰越金 一、〇〇二、三一七円

合計 一、三三五、四四三元

◎ 二〇一九年度卒業論文・修士論文発表会

(二〇二〇年二月二十八日)

【卒業論文発表】

渡辺 双葉 「乙部町三ツ谷貝塚出土動物遺存体の分析」

今野 翔太 「コンスタンティウス2世の帝国統治―元老院との関係

性を中心に―」

秋山 萌 「田具沼と清末学務」

今泉 峻悟 「近世後期の八王子千人同心と地方引請人」

【修士論文発表】

千葉 康平 「日本古代における衛士」

高橋 稜央 「後ウマイヤ朝期アンダルス社会とキリスト教徒をめぐ

る法学議論」

田中 秀樹 「フランス革命期におけるふくろう党像の再検討―ウー

ル・エロワール県の事例から―」

◎ 二〇一九年度博士論文・修士論文・学士論文題目

【日本史学研究室】

●博士論文

ウグル アルトウン 「参謀本部の情報活動と日本外交―バルカン戦

争を中心に―

楊 茜 「対華二一カ条をめぐる中日両国の交渉―山東問題を中

心に―」

北山 祥子 「建国神話の政治学―檀君神話を中心に―」

鈴木 仁 「樺太における郷土文化の形成と展開」

●修士論文

千葉 康平 「日本古代における衛士」

久保 南 「第一次幕領期における蝦夷地警衛」

張 易臻 「日本帝国の拡張と台湾旧慣調査」

金 奎潏 「植民地期朝鮮における古美術品収集の実践に関する研

究」

津久井 薫 「観光から見る「満州国」とその社会」

春名恭太郎 「北海道総合開発の史的分析」

●学士論文

旭 佑太 「オランダ通詞体制の変化と森山栄之助の活動」

今泉 峻悟「近世後期の八王子千人同心と地方引請人」

大黒 智弘「戦国期紀州在地勢力の結びつき―雑賀衆を中心に―」

大山 豪生「新選組の有志集団としての実態」

工藤未沙緒「幕末期下伊那地方の中間層と平田国学」

金 哲史「元禄・享保期の君臣秩序と儒者」

澤田 泉「国会開設勅諭と自由民権運動」

成田明日香「天明の飢饉下における弘前藩」

新島 俊輝「株仲間としての飛脚問屋」

林 蓉未「後期読本挿絵と葛飾北斎」

久本明日哉「矢内原忠雄と満州移民」

細川 雄司「斬首から絞首へ」

谷澤 彰司「中近世移行期の大名権力確立過程について」

柳川 美貴「大正・昭和初期の高等小学校における普通教育と実業教育」

山田 志保「日本古代の采女について」

【東洋史学研究室】

● 修士論文

高橋 稜史「後ウマイヤ朝期アンダルス社会とキリスト教徒をめぐる法学議論」

長瀬 篤音「タイムール朝末期における辺境の再編」

坂東 泰「清末禁煙運動の研究」

● 学士論文

秋山 萌「田呉焯と清末学務」

水越 秋良「一九世紀アルメニア民族運動」

吉澤 圭祐「第二次奉天戦争後の政体問題」

海野翔太郎「ファクトワー集an'it'saiを通して見たハプス朝期イフ

リーキヤのマドラサ」

佐藤 穰「トルコ革命期におけるイスタンブル政府」

原 葉「東亜研究所における回教研究」

【西洋史学研究室】

● 修士論文

田中 秀樹「フランス革命期におけるふくろう党像の再検討―ウー

ルⅡエⅡロワール県の事例から―」

酒井裕美子「17世紀中葉におけるスウェーデン王と帝国内制」

● 学士論文

池内 達基「古代ローマの恵与指向（エヴェルジェティズム）」

越田りるか「黒人バレイーナと現代アメリカカバレエの人種規範」

高栖 啓吾「第二次大戦後ポーランドにおけるナシヨナリズムの変容」

萩原 沙奈「インナー・シテイ問題からみる福祉国家の反転」

山本 千尋「イギリス帝国のインド森林政策―民衆の抵抗運動に注

目して―」

小林 芽以「16・17世紀フランスにおけるバレエと宮廷」

今野 翔太「コンスタンティウス2世の帝国統治―元老院との関係

性を中心に―」

武村 祐多「第二次世界大戦におけるロンメル將軍と電撃戦」

大黒 将五「リヴァプールにおけるサッカー・フリーガニズム」

倉澤 綾野「ローマ帝国における人の移動―都市ローマへの移民を

中心に―」

高橋 陸拓「革命期ロシアにおけるインテリゲンツィアの変容」

本間 圭太「フランス革命期の非キリスト教化運動」

藤井 信充「スコットランドにおけるクロフティング・コミュニティ

テイの歴史的意義

三浦 彩華「政治家としての画家ジャック・ルイ・ダヴィッド」
村口 野阿「古代ローマにおける医療と宗教―ガレノスを中心に―」

【考古学研究室】

● 学士論文

坂口 廉「サクシユコトニ川遺跡出土炭化種子の研究―サイズの

検討を中心に―」

中沢 海友「勝坂式土器の文様と成り立ちについて」

渡辺 双葉「乙部町三ツ谷貝塚出土動物遺存体の分析」

◎ 研究室便り

〈日本史学研究室〉

二〇一九年度の改組に伴って日本史学講座から日本史学研究室に名称が変更されました。現在、教員七名の体制で研究・教育にあたっています（権錫永先生は二〇二〇年度後期サバティカル研修）。事務補助員の川本愛さんにも、ひきつづき研究室運営にご尽力いただいています。

二〇二〇年最大のできごとは、言うまでもなく新型コロナウイルス感染対策です。大学への出入りがきびしく制限されるなか、授業はオンラインで行われました。オンライン授業の方式は多様であり、そのなかでもオンデマンド授業と称される、文字や音声データをエクス上にアップロードして、学生は随時閲覧する、という形式が多かったようです。対面授業ではあまり発言しない学生からの意見や感想も目にするのができたという利点があった一方で、図

書館や研究室の使用が限られていたために、史料・文献を探すのが困難であったという問題点が指摘されています。また、オンデマンド授業でも文書をアップロードするだけでなく、学生からリアクションペーパーを提出させ、さらに教員からリアクションペーパーへの回答を文字と音声とで返す、という膨大な作業を行った例もあります。

世界的に普及したZoomは、日本史学研究室でも身近なものになりました。たとえば近世史では、Zoomミーティング方式で院ゼミ、学部ゼミを行いました。博論口頭試問や個別研究指導でもZoomが多く用いられました。また、中世史では、Webexおよび討論フォーラム併用で院ゼミ、学部ゼミを行いました。

コンバ、合宿、資料調査といった研究室行事、各時代別ゼミ行事はほぼすべて中止となりました。しかし、学生の自主ゼミは行われたようです。古代史では、学生は、自主的にZoomを使って、文字どおり「自主ゼミ」を行いました。マイクを通じた音声も不明瞭で漢文史料の読み方の正否を確認しづらい、というようなこともあったようです。後期は、制約が多い中でも、一昨年から行っている大学院ゼミの奈良見学旅行を今年も十月末に実施しました。正倉院展・平城宮跡資料館を中心に古代史関係の文物・史跡を見学しました。中世史では、上級生がLINEの全体グループ（在学生の構成するもの）に二年生を引き込み、Web上で集まって基礎的な史料の講読をしていたようです。近代史では、伝統の原敬日記を解読する自主ゼミが、五、六月に例年通り博士課程院生が主導してオンラインで行われました。

昨年度（および博士は今年度九月まで）学窓を巣立たれた皆さんは、博士四名、修士六名、学士十五名でした。卒業・修了の日に盛大なお祝いができなかったことが大変残念でした。それぞれ各方面

でのご活躍を祈念いたします。

(文責＝白木沢旭児)

〈東洋史学研究室〉

本年九月現在、東洋史学研究室は、教員三名、大学院・博士課程四名、修士課程二年生五名、一年生二名、学部・四年生八名、三年生六名、二年生五名の計三十三名で構成されている。

この一年間、研究室には二つの大きな出来事があった。

まず、本学会の会長でもあった太田敬子先生が、昨年一月に急逝されたことをお伝えしなければならない。長年持病を抱えていたという。しかし、それは山本文彦研究院長にしか伝えられていなかった。研究室から突然姿を消した先生の行方を心配するほかなかったところに、いきなり危篤の知らせに接した我々は、驚くよりもただ啞然とした。先生自身も、ちよつと診察に行つてすぐに戻つて来るつもりだったのだろう。その後、佐藤健太郎氏の尽力により、二月一日に「お別れの会」がW棟でしめやかにとり行われ、内外から六〇名を越える参加者を迎え、先生の思い出を語りあい、皆で追悼した。先生の貴重な蔵書は、遺族の意向によって多くが本学に寄贈された。謹んでご冥福をお祈りする。

二つ目の出来事は、宋代史を専門とする梅村尚樹氏が、本年四月に新任教員として着任したことである。今後の活躍を期待したい。本研究室の教員欠員の補充と東二・西二の教員四人体制への回帰は、我々の長年の悲願であり、実は太田先生にとつても、この人事の最終面接と選考会議への参加が、最後の公務となった。先生とともに梅村氏を迎え、四人体制の復活を喜ぶことができなかったことが、非常に残念でならない。

太田先生を失つた打撃は大きいですが、梅村氏を迎えたことで何とか三人体制が維持され、また新しい風が吹き込まれたおかげで、一度

は悲嘆の中にあつた研究室は、数カ月来のコロナ禍をもとめせず、今日また活況を呈するに至っている。学生・院生が研究室で卒論・修論に取り組み姿も戻つてきた。「史朋」は相変わらず休刊のままであり、本来開くべきところである「談話会」も、コロナ禍のために二月以来休止状態だが、数年ぶりに院生数が増えた状況の中で、彼らが主体となつて「談話会」の再開に向けて動き出しつつあることを、教員一同、頼もしく見ている。

古来、南中国は「瘴癘の地」であり、今後もわが国に厄災が及ぶ可能性はある。しかし我々は、必ずや力を合わせてそれを乗り越えていけるだろう。研究室のこの一年間の歩みを振り返り、そのことを確信している。

(執筆担当・吉開)

〈西洋史学研究室〉

令和二年度の西洋史学研究室では、九月末の時点で、二年生が十三名、三年生が十六名、卒論提出年次生が十九名、修士課程に八名、博士課程に二名、専門研究員が三名という所属状況になっており、大きな変化はありません。ただ、新型コロナウイルスの影響で、既に行われた院試で当研究室の志望者が大きく減りました。想定しうる結果ですが、心配なところです。教員は砂田・山本・長谷川・村田・松島の五名が、それぞれ教育と研究に力を尽くしています。しかしながら、年が明けて拡大した新型コロナウイルス感染症の影響は、北海道大学全体でも、当研究室でも、甚大なものでありました。授業の開始がオンライン化の準備をゼロから整える必要がありました。新興のウェブ会議ソフトなど触つたこともなく、大学が用意しているオンライン授業配信システムも、既に何年も前から稼働していることすら知らない状態でした。そんな中、藤田文学部長が授業

のオンライン化を指南するワーキンググループを編成してください。ことは、本当に助かりました。

四月の末、まだ我々が置かれている状況が不明瞭な中で、ネット時代の先駆者を自任する一部の私大が、体制が整ったとして、いち早くオンライン授業を開始したところ、接続過多によってサーバーが落ちて履修不能になるといって、ごく初歩的な失態をさらしたことは衝撃的でした。それを受けてワーキンググループから提言があり、文学部では、大学のネットワークに負荷をかける同時配信や動画教材は避け、教材の作成と課題の採点で教員にかなりの負荷がかかるオンデマンド授業を基本とすることになって、久しぶりに毎週徹夜しました。ゼミはウェブ会議ソフトと相性が良く、大学のネットワークにも負荷をかけないので、順調に運用できました。我々一般教員は、ワーキンググループの先生方の血のにじむような努力の成果を受けて、比較的低いハードルを越えて、授業のオンライン移行と安定的な運用ができたのです。そのような指南役がいなかった他学部、そして他大学では、かなり酷い混乱が生じたところもあったと聞きます。

(文責：松島)

〈考古学研究室〉

二〇一九年度からの文学院への改組により、旧北方文化論講座から考古学分野が独立し、考古学研究室が新設されました。発足時点の構成員は、教員二名、博士研究員一名、博士後期課程一名、修士課程一名、学部生一三名の計一九名です。また、総合博物館の江田真毅准教授、埋蔵文化財調査センターの高倉純助教が文学院考古学研究室の教育体制に加わったことにより、大学院の教育体制が大幅に強化されました。近年、大学院生の確保が大きな課題になっていますが、今回の改組が学部教育にも相乗効果をもたらし、他大学か

らの進学者だけでなく内部進学者も増加させる効果を生むことが期待されます。研究室のホームページも新設し、情報発信に努めているところです (<https://hokudai-ko.kokosakurane.jp>)。

考古学分野では、夏季の野外実習として毎年恒例の豊浦町礼文華遺跡発掘調査(第九回)を実施しました(二〇二〇年八月二十五日(九月六日))。今年は、新型コロナウイルスの影響により、感染対策を徹底したうえで大幅に規模を縮小して実施しました。小規模な調査ではありましたが、遺跡北側での遺構の発見など一定の成果がありました。例年実施している一般教育演習(フレッツシユマンゼミナー)、全学教育「フィールド体験型プログラム」、現地説明会、礼文華小学校児童の体験発掘は、残念ながらすべて中止となりました。来年度は、通常通り行うことができることを願っています。豊浦町教育委員会・豊浦町役場・豊浦町郷土研究会・礼文華地区の方々からは今年も変わらぬ支援を賜りました。あつく御礼申し上げます。

小杉教授は、学内での埋蔵文化財調査センターの運営、北大歴史的資産活用TF委員、学外での史跡垣ノ島遺跡保存整備検討委員会(函館市)、北海道文化財保護審議会(北海道)、星葉峠黒曜石原地遺跡調査指導委員会(長野県長和町)、史跡キウス周堤墓群保存活用計画検討委員会委員(千歳市)などを通じて、史跡の整備・活用や文化財保護への見識を広げることができました。関連した講演会としては是川考古館(青森県八戸市)主催の考古学講座『世界遺産としての縄文遺跡の価値を考える』を行いました。

高瀬准教授は、科研費(基盤A)のプロジェクトが最終年度であったため、海外出張は冬季のロシア調査にとどめ、成果をまとめる作業に注力しました。教育面では、新型コロナウイルス感染症拡大前であったため、トロント大学との合同授業を北海道およびカナダ

で予定通り実施することができました。しかし、受入予定だった海外からの研究者の来日はすべて延期となりました。北海道東部の竪穴住居群調査懇談会に関連する講演会、標津町文化財保存活用検討委員会などを通して社会貢献活動も行いましたが、これらの今後の活動も不透明になってきています。

今年の考古学研究室からは、学部生三名が巣立ちました。それぞれ希望の進路に進みましたが、一名は大学院に進学しました。今後、内部進学者が増えてくることを期待しています。

